

WHO

新型インフルエンザ(H1N1)2009年ワクチン 要約ノート 16

2009年11月19日 | ジュネーブ

本日までに WHO は国単位で H1N1 新型インフルエンザワクチン（以下「新型インフルエンザ」）接種キャンペーンを実施している約 40 か国のうち、16 カ国からワクチンに関する情報を入手しました。この 16 カ国の情報によると約 8,000 万回分のワクチンが出荷され、すでに約 6500 万人が接種を完了したとのことです。ワクチン接種キャンペーンはオーストラリア、中華人民共和国で 9 月終わりから始まっていました。

ワクチン接種キャンペーンは新型インフルエンザから国民を守るために現在も実施されていますが、いくつかの国ではこれまでにない規模で行われています。このくらい大きな規模でワクチン接種を行うことを考えると、大規模臨床試験でも捉えることのできない稀な副反応が起こりえます。今日までの結果は希望が持てるものでした。

よく見られる副反応

予測されるとおり、接種部位の腫脹、発赤、疼痛はあるものの、接種後短時間のうちに自然に消失します。

接種後短時間に起こる発熱、頭痛、倦怠感、筋肉痛などの報告もありますが、頻度はより低く、これらの症状は通常 48 時間以内に自然に消失します。さらに、さまざまなアレルギー反応が観察されていますが、頻度は予想された範囲内に収まっています。

ギラン-バレー症候群

現在までのところワクチンを接種したもののうち報告があるのは 10 例未満です。最近の研究にある通り、これは通常予想される範囲内の発生数です。このような事情ですが副反応が偶然起こったものかワクチン由来のものなのかをギランバレー症候群を発症した全ての例で現在検討しているところです。

ワクチンキャンペーンが始まって以降、WHO はギランバレー症候群が疑われる、あるいは確定した症例での死亡例はなく、全例回復しています。WHO ではギランバレー症候群の活発かつ継続的なモニタリングを推奨しています。

死亡者の調査

ワクチン接種者には少数ながら死亡者も出ています。WHO に報告された全ての死亡者には

直ちに調査が行われています。いくつかの事例は現在も調査中ですが、WHOに報告された調査完了例ではワクチンを死亡原因とする直接のつながりはありませんでした。例として1,100万回の接種が行われた中国ではワクチン接種後に重篤な副反応を起こした15例との死亡例2例を報告しました。解剖を含めた死亡例の調査から、死因は基礎疾患であり、ワクチンによるものではないことが明らかになりました。

異なるワクチンの安全性

キャンペーンではアジュバント未添加不活化ワクチン、アジュバント添加不活化ワクチン、生ワクチンを用いていました。今日までのところワクチンの種類が異なっても重篤な副反応は報告されていません。

ワクチンの安全性について監視は続けられていますが、今日までにまとめられた全てのデータから新型インフルエンザワクチンはすぐれた安全性を有し、60年以上も使用されてきた季節性インフルエンザワクチンと一致するものでした。